



# 棋譜の息遣い

## 井山裕太

私は五歳から囲碁を始めた。最初は父を相手に、その後はアマチュア六段の祖父が相手となり、やがて碁会所に通うようになった。少しずつ力がついてきてテレビの囲碁番組出演がご縁となって石井邦生九段に弟子入りの運びとなった。しかしながら石井先生のご自宅と私の家はかなり離れていたもので、当時ようやく普及し始めた電話回線を繋いだインターネット対局で週二回ほど指導していただくという方法がとられた。プロの養成機関である日本棋院の「院生」になるまで二年余りこのやり方が続けられた。

院生になるとこの形の指導は減っていくことになる。それは院生同士の手合(対局)が入ってくるからなのだ。ここで活躍してくれたのが棋譜を記入する棋譜用紙。いまならパソコンを使うのだけれど、

当時は当然のごとく手書きで写すことに。対局後、じっくり時間をかけて写すことで自分なりに振り返りができ、疑問や課題が見えてくる。

そういったことを手紙にしたためて棋譜の用紙とともに師匠に送る。すると赤字が入った棋譜と助言が書かれた返信がくる。師匠は棋譜に目を通すことで私の囲碁に対する勉強態度すべてがわかるようで、伸び悩んでいるときに「負けて何万回涙を流したって欠点を直さなければ結果は出ない。詰碁の勉強をせよ」と厳しく指摘されたことは昨日のことのように憶えている。

これらすべての手紙は大切にとっており、ときどき読み返しては「あの頃はこんな風に考えていたんだなあ」と、自分の囲碁の変化に気づかされるのだ。

囲碁のタイトル戦の後援には新聞社がついてくださるが、紙面の囲碁欄もとても役に立つ。大事に切り抜いてまとめたものを師匠から頂いたときは嬉しかった。カバンの中に入れて時間があれば見ているものだ。

また名勝負の棋譜は作品と呼ぶにふさわしく、棋士の心持ち、考え方がそこから読み取れて、あらためて記録の大切さを感じさせられる。



いやま・ゆうた ● 囲碁棋士  
1989年5月24日生まれ。大阪府出身。石井邦生九段門下。5歳から囲碁を始め、12歳でプロ棋士になり、2016年・17年の2度にわたり囲碁界初の棋聖、名人、本因坊、王座、天元、碁聖、十段の7冠同時制覇を達成。2018年国民栄誉賞受賞。

(公財)日本棋院 幽玄の間にて

Photo: Shiro Miyake

紙で出来ているといえば対局中に使う扇子も大事なものです。暑いからあおぐ、だけではなく扇子を握り、持ち直すことでうまく書き表せないけれど、「別の思考の回路」を開ききつかけになり、またリズムが生まれるように思う。

タイトルを獲得すると表彰式の際に允許状いんげんじょうという賞状のようなものを頂く。額装して壁に飾るのだが、おかげさまでその数が増えている。あらためて見渡すと「ここまでよくできたなあ」といままでの頑張りの証明書のようにも思えて感懐深いものだ。

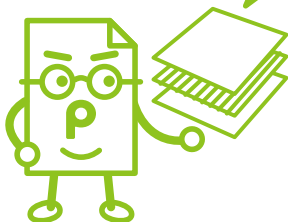
七冠を初めて達成したあと、色紙に「七冠」と書いた。それまでは夢見心地だったものが色紙に書くことで実感が湧いてきて、喜びがこみ上げてきたのも面白い体験だった。

これからは世界戦にも積極的に参戦して、強い日本囲碁の復活を目指していきたい。

## ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

### 段ボールは、「3」がカギ。

1本ではもろい矢も、3本あわせれば強くなる。段ボールだってそうなんです。ライナと呼ばれる2枚のボール紙と、その間に入っている中しんと呼ばれる波形のボール紙。この3枚で支えあうことで、紙とは思えないほど頑丈に。なんと重さ1t以上のクルマを、段ボール4つで支えられるほどなんです。



#### 段ボールの基本構造

- ボール紙 / ライナ
- 波形ボール紙 / 中しん
- 接着面

紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、[「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。](http://kamitsubu.com/)

今回は9月6日号、磯田道史さんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>